



生涯学習研究所だより

Contents

- ▶ 所長挨拶／長江曜子「地域に開かれた生涯学習研究所をめざして」
- ▶ ご案内「アートパーク10～ラブ&ピース大作戦～」
- ▶ 特集 アートパークプロジェクト 2008→2017 10年を振り返る
- ▶ 協力シンポジウム報告／日本葬送文化学会 30周年シンポジウム
- ▶ 図書館の今を追う／谷由美子「また明日行きたくなる子育て支援型図書館」
- ▶ 世界の生涯学習／山崎未玖「学ぶことを大切にす国から学んだこと」
- ▶ こども環境学会 2017年北海道大会レポート／神谷明宏
- ▶ 参画教育の意義を探る／有川かおり「生涯学習の視点からみた参画教育の価値」
- ▶ 研究・実践レポート
- ▶ 編集後記

VOL.
4

発行／聖徳大学生涯学習研究所

編集長／長江曜子

編集／有川かおり

発行月／2017年6月

〒271-8551

千葉県松戸市松戸 1169

聖徳大学生涯学習社会貢献センター6階

TEL 047-365-5691

FAX 047-365-5692

MAIL frontier@seitoku.ac.jp



ジュニア夢カレッジ2～プロから学ぶお仕事体験～（幼稚園教諭・保育士体験）

所長挨拶



“地域に開かれた生涯学習研究所をめざして”―来年は、20周年

聖徳大学生涯学習研究所所長に就任して、お陰さまで丸3年が過ぎました。当研究所は次の3つの柱を立てて活動しています。①子どもから高齢者まで、学ぶことの楽しさと幸福な学びを追究する研究所でありたい。生涯学習というと、高齢者の学びと誤解されていますが、一生涯にわたる、人間形成と自己研鑽が実は、大切です。②長い人生の中で、新しい技術や知識を得る、リカレント教育、③地域創生、社会貢献、まちづくりの視点に基づく研究が重要です。

今年度は、研究所設立19年目に当たり、7月に「アートパーク10」、秋には生涯学習に関する講演会の実施、12月には「ジュニア夢カレッジ3」の開催、各種課題別研究会の開催と盛りだくさんの企画が満載です。ぜひ、松戸駅東口から徒歩1分の生涯学習研究所で新しい出会いを体験しましょう。お待ちしております。

聖徳大学生涯学習研究所 所長 **長江 曜子**

ご案内「アートパーク10～ラブ&ピース大作戦～」

2008年から産官学民連携で、継続して実施しているアートパークは、今年度で10回目の開催となります。記念すべき、第10回目のアートパーク！いったいどんなアートパークになるのでしょうか？開催や、活動内容等はブログ(<http://artpark.exblog.jp/>)をご確認ください。絵の具等を使用するワークショップも予定しておりますので、汚れても良い服装でご来場下さい。沢山の方のご来場をお待ちしております。

日時：2017年7月2日(日) 10:00～15:00

※雨天の場合7月16日(日)に延期

場所：松戸中央公園

参加費：無料

事前申し込み：不要

対象：松戸市内外の幼児、小学生、親子



アートパーク9

ホームページ・公式 Facebook ページのご案内

聖徳大学生涯学習研究所の最新情報は、ホームページ・公式 Facebook にて公開しております。ぜひご覧ください。

<ホームページ> <http://www.tunagari.jp/> <公式 Facebook ページ> <https://www.facebook.com/seitokusyougai/>



特集アートパークプロジェクト

2008年→2017年 10年をふり返る

10年の節目を迎え、さらに進化を続けるアートパーク。節目の年だからこそ、原点にかえて「そもそもアートパークって何?」、「活動が始まった経緯」や、「アートパークのこれから」を、特集でお届けします。



What?
アートパークプロジェクト
「アートパーク」は、聖徳大学と地域、行政が協力し、松戸中央公園で2008年から継続的に実施しているアートプロジェクトです。



プロジェクト発足の経緯と立ち上げ時の想い

立ち上げメンバーの1人
大成哲雄教授に聞きました!

発足の経緯は何ですか?

「アートパーク」は、文部科学省の社会連携研究事業の一環として「地域・若者交流」および「学生の社会参画力育成」をテーマに実施したのが始まりです。立ち上げ時の具体的な議論は、2008年に生涯学習研究所とNPOをはじめとする地域活動実践者、それをバックアップしている行政が連携し、月1回ペースで実施していた「地域子育て学ネットワーク」という研究会で行って来ました。現在は、4月頃から月1回ペースで、「NPOをはじめとする地域活動実践者」「行政」「千葉大学園芸学部」や「松戸市内中学校美術部有志」「聖徳大学教職員・学生」等の関係者が集まり、その年のアートパークのテーマやワークショップの内容についての議論をしています。

なぜ、会場が「松戸中央公園」なのですか?

会場である松戸中央公園は、大学と目と鼻の先の距離でありながら、これまで学生も教職員もあまり関心を示さない場所でした。初めて公園を見に行くと、子どもの姿は少なく閑散としていました(写真④参照)。地域住民の方から話を聞くと、昔は子どもたちがたくさん遊んでいたようです。

公園は子どもたちにとって「遊びの場」であり、「学びの場」であることが、あるべき姿の一つだと思います。しかし現状は違いました。そこで私達は、アートパークを実施することによって、子どもたちが公園でかつてのように自由に遊び、活気が取り戻せないかと考えました。第1回アートパークの副題が「公園改造計画」であるのは、そんな想いを込めているからです。

過去9回を通じて見えてきたもの

活動を通じて、どんなことを感じていますか?

先程お話した通り、アートパークの目的の1つに「公園をより良い場所にする」ということが有ります。アートパークが、直接的な原因では無いかもしれませんが、何度かアートパークを開催していくうちに、普段の日に松戸中央公園で子ども達が遊ぶ姿を多く見るようになりました。地域の方からも、アートパークの参加者が増えるたびに、公園で子どもが多く遊ぶようになってきたとおっしゃっていただきました。アートパークは、改めて公園を見つめなおすきっかけになっているのだと思います。

学生たちは、準備も含めた一連の活動を通じて、企画力や実践力をつけています。そして活動を通じて「広い意味での子どもを発見」しているのだと思います。ここでいう「広い意味での子ども」というのは、普段先生や親には見せない「子ども本来の姿」のことです。大人のみならず、子どもも社会の中で、様々な鎧をつけて生活しているのかもしれませんが、その鎧が少し外せる場所がアートパークなのです。「子どもとは?」という本質的な問いを考えることが、将来子どもと関わる学生達にとっての学びになっているのだと思います。

大学と地域連携

大学が地域と連携し、アートプロジェクトを実施する価値は何だと思えますか?

今、大学の在り方は大きく変化しています。これまでの教育と研究に加え、地域貢献というミッションが新たに加わりました。現在どの大学も、様々な取り組みを実施しています。

先程の「活動を通じて見えてきたもの」に通じる部分も有りますが、アートパーク自体が、「地域を良くする」という共通の目的を持っている人々を繋ぎきっかけになっているという感じがしています。これは、フラットな関係で一緒に活動してきた成果であると思います。

回を重ねていく毎に、お互いに刺激を受けながら、別の場所でもコラボレーションをする機会も増えてきました。その中で、象徴的な出来事が、松戸まちづくり会議(松戸駅周辺13自治会・町会が加入している、まちづくり団体)が主催している「ラストサマー盆踊り」に、アートパーク7

で作成した「きのこロボット」が参加したことです(写真⑤参照)。このことは、単に作品が地域のお祭りに再登場した以上の意味が有ると思っています。活動を通じて、一緒に活動をしている方々が、年々信頼できる仲間になっているという実感も有ります。「アートパーク」とは、当日の活動だけではなく、準備段階やそこから発展していく活動も指しています。「地域を巻き込んだ運動体」がアートパークなのです。これが、アートパークを、「大学と地域を結ぶ研究」をしている生涯学習研究所が実施している意味なのだと感じています。



次のページでは、過去に実施したアートパークをダイジェストで振り返ります。
(インタビューー 有川かおり)



- ①前年に作成した作品をメイン会場へのアプローチに展示した。(アートパーク9)
- ②カブラ。蚊帳を使った空間演出は涼しさも演出。奥のテントは授乳室も兼ねている。(アートパーク6)
- ③保育士の子どもからの夢が実現「おかしな家」。子どもたちが作ったお菓子の工作でどんどん変化した。(アートパーク6)
- ④2008年の松戸中央公園。子どもが遊んでいなく閑散としている。
- ⑤松戸まちづくり会議主催の盆踊りにきのこロボットも参加。周りを市民が躍った。(松戸ラストサマー盆踊り)



過去に実施したアートパーク (ダイジェスト版)

ここでは、今まで実施してきたアートパークをダイジェストで振り返ります。



■集まれ！アートパーク 公園改造計画 2008年7月20日(日) 10:00~14:30

1回目と2回目のアートパークは、文部科学省の社会連携研究事業の一環として行い、学生の社会人育成が目的の1つでした。当時の聖徳大学は、学生が地域に出ていく活動が殆ど無く、まさに手探りの状況でのスタートでした。

実施ワークショップ「アクションペインティング」「空気に絵を描こう！」「滑り台ソウさん計画」「夢のハイジブランコ」「お家に絵を描こう！」

■集まれ！あそびの天才 2009年7月5日(日) 10:30~14:30

一時的にタイトルが「アート」から「あそび」に変更になった回です。2回目は、公園全体を使ったものの、更に場所を活かした活動を展開できないか？地域に必要な活動って？など、疑問点や反省点などをふまえ、今後のアートパークの方向性を考える契機となりました。

実施ワークショップ「カラー水鉄砲」「たこ作り」「竹馬」「ツイスター」「害虫退治」「アクションペインティング」「スーパー紙とんぼ」

■集まれ！アートパーク 音であそぼう♪ 2010年7月4日(日) 10:00~15:00

現在のアートパークの形ができたのが、この第3回でした。文部科学省の社会連携研究事業も終わり、この回から生涯学習研究所が主催で行うことになりました。様々な人が関わるため、統一テーマが有った方が良いということで、「音」をテーマにワークショップを実施することになりました。

実施ワークショップ「音であそぼう」「手づくり楽器で遊ぼう！」「だんだんタワー」「ダンス！ダンス！ダンス！」「スーパー紙トンボ」「ハングミュージック」「ワクワク音迷路」「砂よこし／絵本の森へようこそ」「音もだちランド」「森のキンコンカン」「サウンドアドベンチャー」

■集まれ！アートパーク からだであそぼう 2011年7月10日(日) 10:00~15:00

4回目はターニングポイントとなる回でした。この年の3月に東日本大震災が起り、放射能の影響で外遊びは自粛モードになりました。週刊誌では松戸中央公園がホットスポットであるような表現がされ、開催すべきかどうかを検討することになりました。自治体や国のデータを基に何度も議論し、開催しないことは「公園が危険な場所」というメッセージを発信することになる」という判断で、参加者が少なかつたとしても、開催しようということになりました。結果として前年より多くの参加者が集まることになりました。この判断によって、アートパークが、「子ども向けイベント」

から、「より社会へのメッセージ性を持った子ども向けイベント」へと変化していきました。なお、この回から児童学研究所も主催に加わっています。

実施ワークショップ「音であそぼう」「手づくり楽器で遊ぼう！」「だんだんタワー」「ダンス！ダンス！ダンス！」「スーパー紙トンボ」「ハングミュージック」「ワクワク音迷路」「砂よこし／絵本の森へようこそ」「音もだちランド」「森のキンコンカン」「サウンドアドベンチャー」

■アートパーク 5 こどものじかん 2012年7月1日(日) 10:00~15:00

5回目のアートパークは「より地域と活動を創っていききたい」という想いから、学内の一部団体と地域団体がチームを組み、ワークショップの企画・実施を行いました。このことにより、企画段階から各々の活動場所を訪問する等の交流が生まれ、信頼関係を深めるきっかけとなりました。

実施ワークショップ「ぐるっとタワー」「おやすみどろ」「こどもトンネル」「ハンド・ランド」「ふむふみぬがが」「しゃぼん玉研究所」「こねてみないか？どんどろどろどろりんちよ！」「ぶらさげルンルン」

■アートパーク 6 みんな子ども宣言 2013年7月7日(日) 10:00~15:00

運営方法や組織体制等、蓄積してきたノウハウが十分に発揮された回でした。開始当初の参加者は近隣の方が中心でしたが、松戸市全域から参加者が集まるようになりました。参加者も1200名になり、リピーターも増えるなど、「地域にアートパークが定着してきた」と実感することができました。

実施ワークショップ「クルクル象バスパレード」「こねてみないか？どんどろどろどろりんちよ2」「森のもくもく製作所&おやすみ処」「おかしな家」「みどりのなかで…カブラで…あ・そ・ぼ」「ピカソチック」「こもれびすいぞくかん」「The Matsudo Hatter—いかれ帽子屋—」「おかしな家」

■アートパーク 7 みんなゲイジュツ化宣言 2014年7月6日(日) 10:00~15:00

この年、震災後に利用されなくなったプールが解体され、跡地には広い空間が生まれました。このことにより、何となく分断されたようなイメージがあった公園と大学が、空間的に1つになったような印象になりました。公園の新たな使い方も検討し、活動自体に幅が生まれました。

実施ワークショップ「まつどのコックさん」「きのこロボット」「おおきな世界」「素材からのひらめき・アートとサイエンスは友達」「まつど Atelier・まつど Museum」「木と、ともだち！」「くるくるどうぶつパレード」「空に向かってカブラ・KAPULA・カブラ！」「☆もくもく製作所 ほしめぐり☆」「お休み処 Museum カフェ」

■アートパーク 8 みんなバクハツ宣言 2015年7月19日(日) 10:00~15:00

この回より、千葉大学園芸学部木下ゼミが参画することになりました。木下ゼミは留学生も多く、アートパークが一気に国際化した回でもあります。今まで無かった専門性を持つグループの登場により、新しい発想も生まれていきました。聖徳大学の学生が千葉大学を訪問するなど、相互交流も始まりました。

実施ワークショップ「トンデモボール」「釣るっCHA!!! 2015」「ぴっくり！みんなの不思議なパネレスイーター」「あおぞらキャンパス」「音乙女(おとめ)〜みんなで楽しくLet's Music〜」「つなげよう！夢をつめこむペーパーバック」「公園のおぼけ」「はちやめちやランド」「べたべたモンスター」「爆発する迷路」「ワー！ショック！しよくぶつアート」「カラカラチリンカブラで遊ぼう！もくもく製作所「せいたかポッコのぼうけん」」「わくわくつなぐ おみせやさん」

■アートパーク 9 にちようびの野望 2016年7月3日(日) 10:00~15:00

この回から、松戸市中学校美術部有志が参画することになりました。中学生たちは、自分たちの作品が「遊具になること」「誰かのためになること」を喜んでいました。千葉大学園芸学部木下ゼミの留学生に加え、海外アーティストも加わり、さらに国際化が加速しました。参加者数も、この年初めて1,800名をこえ、地域の認知度がますます向上していると実感した回でした。

実施ワークショップ「出航！あつまる丸」「へんしん！お面工場」「へんてこアニマル」「こうえんのまち」「なんでもくつつきの木」「みんなのあそびばみつけた♪」「ボカボカすいぞくかん」「オオウナバラすごろくかいぞくたちのぼうけん」「ドクダミ・リラクゼーションステーション。。五感で公園をしりましょう。」「カラカラカブラであそぼ！」「森のシアター『つづく・つなぐ・つどろ』」「みんなで作る、飛ばそう。虹のシャボン玉」「バラレル！？トラブル！空想旅行写真館」「公園にマツドラゴンを出現せよう」

「アートパークの記録 2008~2014」もっと詳しく掲載されています！（研究所HPにPDFデータで有ります）



各ワークショップは、どのように出来ているのでしょうか？

ここでは、本研究所の研究員でもある児童学科大成教授のゼミでの活動「出航！あつまる丸」当日までを順を追って解説します。

START

① アートプロジェクトって何？

「アートプロジェクト」や「造形ワークショップ」「ファシリテーター」等の語意を理解し、過去のアートパークを振り返るところからスタートです。

② 造形遊び・遊びを即興で考える

教室と公園の二か所で、造形ワークショップを行いました。

このプログラムには、「今までの物の見方を一度壊すこと」「公園の特性を理解すること」「仲間との信頼関係をつくること」など、沢山の意味があります。

③ テーマの決定

ゼミ希望時にゼミ生たちが出した企画書を見て、イメージを膨らませていきます。話し合いの中で様々な意見が出ましたが、「段ボールの外だけでなく、内側でも遊びたい」という意見が出ました。そういった意見をふまえ、空き箱で試作品を作り、話し合いを重ね、テーマが「船」になりました！

④ 同じアイデア！？でも…！

第1回全体会議の時、千葉大学園芸学部木下ゼミのワークショップも「船」がテーマであることが判明！千葉大学とはワークショップの場所が近いこともあり、今回は一部をコラボ企画でいくことが決まりました。今後、それぞれの活動を情報交換し活動を作っていきます！

⑤ 船の大きさ決定！

教室で段ボールを使って船の大きさのイメージをかためた後、実際に公園に紐を持って行き大きさを決めました。

⑥ 千葉大学園芸学部木下ゼミと合同会議

まず、お互いの企画内容のプレゼンからスタートです。テーマが同じ「船」でも、内容は全く違うものでした。内容を聞いて、お互いの専門性を活かしてアドバイスをしあいました。違う学問をやっている者同士が、一つの目標に向かう過程には多くの刺激があります！

⑦ タイトルの決定！ 「出航！あつまる丸」

千葉大学での合同会議を終え、イメージもどんどんふくらんできました。次の課題は「タイトルをどうするか」です。沢山の意見が出ましたが、前に進むイメージの「出航」と、人が集まって作るという意味を持ち、かつオリジナリティのある響きの「あつまる丸」を合体させ、タイトルが決定しました。

⑧ 「あつまる丸」グループに分かれて制作

「テーマ」「大きさ」「タイトル」「イメージ」が決定し、いよいよ制作に入ります。ここでは「小物」「船首」「翼」など、グループに分かれて制作していきます。グループの作品が出来上がる度に、あつまる丸の全貌が見えてきます！

GOAL

⑨ 「あつまる丸」ついに出港！

ついに当日を迎えました！ゼミ生、子ども達で作った船。皆の夢をのせて、「あつまる丸」出航です！

後日、活動の振り返りをして、プロジェクト終了！

活動内容は、ドキュメンテーションとして、映像・写真などで記録しています。詳しくは <http://artpark.exblog.jp/> (アートパークブログ) をご覧ください。

終活ブームのつぎを本音で考える

—「終活」後の不安を感じた事がありますか？



日本葬送文化学会30周年シンポジウム「終活ブームのつぎを本音で考える—“終活”後の不安を感じた事がありますか？」と題したシンポジウムが5月7日に毎日ホール(千代田区一ツ橋1-1-1、毎日新聞東京本社地下1階)で行われました。こちらのシンポジウムに、生涯学習研究所が開催協力をさせていただきましたので、ご報告をさせていただきます。



日本葬送文化学会30周年シンポジウム 終活ブームのつぎを本音で考える—「終活」後の不安を感じた事がありますか？ 会場の様子



日本葬送文化学会30周年シンポジウム
終活ブームのつぎを本音で考える

「終活」後の不安を感じた事がありますか？

日時: 2017年5月7日(日) 13:30~16:00 (受付開始:13:00)
会場: 毎日ホール 東京都千代田区一ツ橋1-1-1(毎日新聞東京本社地下1階)
主催: 日本葬送文化学会
協力: 聖徳大学生涯学習研究所
内容: 21世紀の日本は、少子・高齢社会が同時に進行し、その解決策を示す上が緊急の課題になっています。そうした中「より自分らしい死を考える」ことを目的として、6~7年前より終活ブームが勃発しました。しかし「自分が自分の死の担い手になること」「生命の大切さを改めて考えること」など、本来の終活の意味から脱し、「単なる葬送の効率化」に軸足を置いて展開されているように感じます。そこで、本シンポジウムでは「より長く生き、最期を迎えるために何が重要か」を、「地域とのつながり」「まちづくり」といった視点も交え、関連領域の専門家及びジャーナリストが一堂に会し議論します。あらかじめ終活について考えてみませんか？

■参加者を交えたフリートーク

第2セッションでは、参加者からの質問に応えるフリートークが行われました。メンバーは、第1セッションに引き続き、八木澤氏、鶴飼氏、長江氏が参加し、コーディネーターは、毎日新聞社会部記者で「身じまい練習帳」を連載(隔週)中の滝野隆浩氏でした。

質問は主に、休み時間に集めた質問用紙を活用して行われました。集まった質問用紙は21枚と多く、身近な問題として「終活」をとらえている参加者が多かったことが伺えます。質問内容は、「葬儀の方法」や「お墓問題」等多岐にわたっていました。その中でも特に、「そもそも、葬儀は誰の為に行うのか」という質問は、会場にいる全員が考えさせられた内容でした。

■終活は誰のため？

ゴールデンウィーク最終日という日程でしたが、167名の方が参加して下さいました。参加して下さいました方は、年配の方はもちろん、20歳代~30歳代と思われる方も数名参加していました。「終活」は、高齢者だけの問題だと思われがちです。しかし、本来は「高齢者」だけの問題ではないのかもしれない。長江氏の発表によると、日本で大流行の「エンディングノート」は1980年代のアメリカで既に葬儀社が販促物として配布していたそうです。また、その内容は、日本のような「自己決定」のノートではなく、いざという時に家族を路頭に迷わせないための「ファミリープロテクションガイド」であったといえます。残される人達も一緒になって考える「終活」のために、生涯学習が出来ることは、まだまだ沢山あるのかもしれないと感じました。(文責 有川かおり)



会場入口



発表する長江氏

また明日行きたくなる子育て支援型図書館

—千葉県柏市立図書館 こども図書館

谷由美子 TANI, Yumiko

聖徳大学生涯学習研究所 職員

聖徳大学人文学部生涯教育文化学科 2011年度卒業生



図書館は今、『無料貸本屋』から『課題解決型図書館』への転換が求められています。今回私は、先駆的な図書館である「千葉県柏市立図書館 こども図書館」を訪問しました。この図書館では、主に乳幼児と保護者を対象としています。特徴は、図書資料の提供にとどまらず、課題を解決するための取り組みを多く実施していることです。具体的には、「子育てや親子の健康に関する情報提供」「行政の子育て関連部署及び保健所等との連携事業の実施」等が挙げられます。本稿では、「活動」「連携」「設備」を中心にご報告します。

■活動 —親子を対象とした各種イベントを毎日開催

こども図書館は、開館当初から乳幼児とその保護者を主な対象としており、乳幼児と本との出会いの場、親子の読書活動の普及の場となることを目的としています。したがって、親子を対象とした各種イベントを毎日開催し、図書館利用者の裾野を広げる活動を行っています。毎日開催している理由について、柏市立図書館の鴨志田さんは、「できるだけ多く子どもと保護者に、絵本に触れるきっかけや楽しみ方、子育てに関する情報等に接して頂きたいからです。特に、本に興味がない保護者や、興味があってもお子さんが本を乱暴に扱わないか心配されている保護者、そういう方にも来て頂きたいと思い、イベントを毎日開催しています」と語っていました。取材当日も、雨の中多くの家族連れがイベントに参加していました。この日は、8つのお話が披露され、どのお話も子ども達は夢中になっていました。



みんなが本に夢中「おはなし会」

■連携 —学校や保健関連部署等との連携

この図書館は、保健師や保育士による講座の実施や、母子保健情報コーナーの設置、ブックスタート事業と連携した「こども図書館」の利用促進等、市の子育て・母子保健に関連する部署及び保健所と連携した事業を実施しています。

また、『学校図書配送コーナー』が併設されており、市内小中学校の学校図書館との連携拠点になっています。柏市では、小中学校全校に『学校図書指導員』を配置し、学力向上の基盤となる学校図書館を活用した授業実践にも力を入れているそうです。また、本に親しむための入り口として、『子ども司書養成講座』『市内中学・高校生知的書評合戦(ビブリオバトル)』を開催する等、乳幼児期からの一貫した読書推進活動が行われているとのことです。



ドリンクコーナー内の母子保健情報コーナー

■設備 —来館者の声に寄り添った環境設備

図書館内はとても明るく広々していて、床は靴を脱いで、寝ころがったりのびのびできるよう床暖房付フローリングになっています。週末は、父親と来館する子どもも多く、親子でゆっくりすることができます。また、赤ちゃんが寝てしまった時のためにベビーベッドを2台設置しています。



明るくゆっくり過ごせる館内

工夫は図書館内だけではなく、図書館の目の前には授乳室・給湯室やドリンクコーナーが設置されていて、授乳室では外に出なくてもすぐオムツを取り換えられるよう工夫されています。また、いつでも飲食が可能ということから、保護者同士の交流の場としても利用されているそうです。また、男性用トイレにも子ども用便座が設置されています。保護者からは、「他の図書館では周りに気をを使うが、この図書館では子どもの声を気にせずリラックスして利用できる」と好評だそうです。

■まとめ —「本」から「人」へ、「人」から「人」へ

取材も終盤に差し掛かった頃、鴨志田さんはこんなことをおっしゃっていました。「核家族化、少子化が進んだため、小さな子どもとどう接したらよいかわからない保護者が多く聞きます。絵本は子どもとコミュニケーションをとるのにとっても良いツールなので、絵本を使って子どもにどんどん話かけてあげてほしいです。また、育児に際して孤立感を感じている保護者には、おはなし会のボランティアと接することにより親子さんを気にかけている地域の人々がいることを感じていただけたらと思います。」

私は、この言葉に改めて人と人の繋がりの重要性を実感しました。図書館は、赤ちゃんから高齢者まで無料かつ自由に行き来することができる数少ない施設です。人間関係が希薄化している今だからこそ、図書館には、「人と人とを繋ぐ役割」が求められているのではないのでしょうか。

図書館には無限の可能性がある。「図書館の可能性について、もっと探求したい」とそんなことを感じた訪問でした。

■谷由美子 プロフィール

本を介在した人との出会いを支援したい・・・

聖徳大学人文学部生涯教育文化学科 2011年度卒業。公立小中学校の学校図書館司書を経て、聖徳大学生涯学習研究所職員。現在、同研究所にて事務をしながら、自身のライフワークである「人と人との繋がりを紡ぐ図書館づくり」に関する考察を深めるべく勉強中。



学ぶことを大切にしている国から学んだこと

ーデンマーク生涯学習施設視察レポート

山崎未玖 YAMAZAKI, Miku

UDS 株式会社、立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士前期課程 2 年
聖徳大学人文学部生涯教育文化学科 2013 年度卒業生

私は、3 年前に聖徳大学生涯教育文化学科を卒業後、自治体の生涯学習センターで広報を担当しました。その後 UDS 株式会社で、地域コーディネーターとして勤務しています。今回は大学生時代から学んできた「生涯学習」を軸に、デンマークの教育現場を視察してきたので、その報告を行います。なお、研修では保育園から教員養成学校まで幅広く視察してきましたが、中でも印象深い小学校と生涯学習センターを中心に報告を行うこととします。

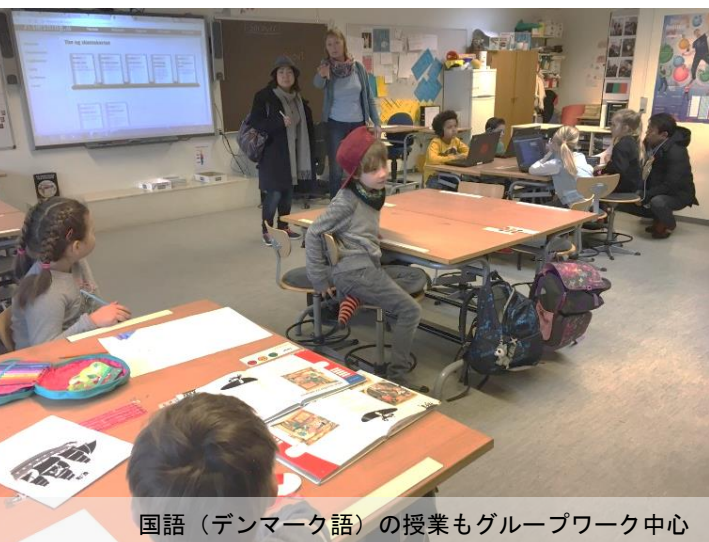
■小学校

デンマークで印象深かった点は2つ「グループワーク」と「民主主義」です。今回は小学校の話ですが、グループワークは小学校だけでなく盛んな訳ではありません。中学・高校や大学もグループワークが中心になっていました。インターネットで「デンマーク グループワーク」と検索すれば、たくさんの記事がでてきます。したがって、これは私の視察だけの話ではないと思います。



小学校の授業風景

デンマークでは、徹底してグループワークで授業が進んでいました。これは、教育のゴールとして「社会に出て自分の得意な点を活かすことが出来る」ことを大事にしているためです。なお、小学校から大学まで、この概念は一貫しています。社会に出る前に「自分は何が得意で何を社会に貢献できるか」徹底的に考えさせられるのです。「社会」というものを「教育」の中でしっかりと位置付けているのが印象的でした。



国語（デンマーク語）の授業もグループワーク中心

■生涯学習センター（フォルケホイスコーレ）

フォルケホイスコーレとは日本で言うのなら「生涯学習センター」や「市民大学」が、それに該当します。デンマーク国の父とも呼ばれているグルンドヴィが設立した学校です。グルンドヴィは外国をまねて暗記教育中心であったデンマーク教育を批判し、「全寮制の学校で日常生活とは離れた場所で人と人が対話を通して学ぶこと」の大切さを訴えていました。



フォルケホイスコーレの提唱者「グルンドヴィ」

フォルケホイスコーレは、デンマーク国内に約70校あり、「音楽やデザイン」「インテリアや手芸」など様々な分野に特化している施設が存在します。視察先の「インターナショナル・ピープルズ・カレッジ（略 IPC）」は、「世界平和」をテーマにしたフォルケホイスコーレです。現在、約 32 か国の留学生が在籍して、学んでいるそうです。特徴としては、「リージョナルスタディー（地域学習）」や「言語（IPC では授業は英語で実施される）」「クリエイティブ（音楽やドラマ）」など様々な科目を複合的に学んでいることが挙げられます。この教育によって、世界を俯瞰してみる力を育てているのです。

例えばデンマークでは「民主主義」が大事なキーワードになっていますが、世界には「民主主義」ではない国もあります。対話を通し、民主主義が本当にいいことなのかを考えるのです。キャリアアップの為の学校ではない。学びを通して自分の考えを深掘りするための学校が、フォルケホイスコーレなのです。



寄宿舎制で、食事も仲間と食べる

■まとめ

今回の研修を通して、生涯学習とは人間に誰しもが備わっている「学びたい」という気持ちをいかに実現するかだと感じました。

先日発表された、OECD 国際成人力調査によると、日本の成人の生涯学習率は先進国でワースト1位でした。この結果には様々な理由があると思います。デンマークは、学生がアルバイトをしながら学ばなくてもいいようにお小遣い制度（給付金）も存在します。残業をしないのが当たり前の風土もあります。日本が学ばなくてはならない点は多々ありますが、日本には日本なりの、「学びたい気持ちを大切にできる支援制度」があってもいいのではないのでしょうか。

IPC の校長先生が言っていたが、「学びたい気持ち」が満たされ、俯瞰する目を育んだ学生は、学校卒業後も地域で市民活動をやったり勉強会をやったり、入学前とは違った活動を始めるそうです。

デンマークは、教育に民間の力が多く参入していました。私も、民間の力と公の力双方を活用して、生涯学習を推進していきたいと考えています。なぜなら、生涯学習は時の政権の考えによって、一過性のブームで終わってはいけなものであると考えているからです。

人々の「学びたい」という気持ちを大事にするためには、私には何が出来るでしょうか？

私の夢は、日本に「まちづくり」をテーマにしたフォルケホイスコーレを創ることです。まずは地元神奈川県海老名市に、「小学生版」「青少年版」を創ることにより、海老名市のまちづくりの担い手を育てていきたいと考えています。今回の視察は、日本の生涯学習・生涯教育を改めて考えるきっかけとなりました。

■山崎未玖 プロフィール

「教育を通じた地域活性化」をビジョンに・・・

聖徳大学人文学部生涯教育文化学科 2013 年度卒業。学生時代より、青少年教育施設でのボランティア活動に励み、現在は民間企業で社会教育主事（地域コーディネーター）として、地元海老名市にあるフューチャーセンター（まちづくりセンター）にて学童保育の運営を行っている。立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科博士前期課程で勉強中の社会人大学院生でもある。



IPCにて 旅の仲間と共に

こども環境学会 2017 年北海道大会レポート

こども環境学会は、学問領域を超えて研究者や実践者が集い、こどもを取り巻く環境＝こども環境について共に研究・提言・実践していく学会です。学術的な総合科学「こども環境学」を確立し、こどものよりよい生育環境を実現していくことを目的としています。こども環境学会と本研究所の最大の共通点は、「学問領域を超えた研究者が集っている点」「学びを通じたまちづくりに着目している点」であると思います。そこで今回は、本研究所の研究者で、こども環境学会の副会長でもある、児童学科神谷明宏教授に大会の様子をレポートしていただきました。

■エクスカージョン

本年度の大会は「遊びで育つこどもたち」をテーマに、北海道恵庭市にある北海道文教大学で 2017 年 5 月 26 日（金）から 28 日（日）に開催された。初日のエクスカージョンは 3 コースで実施され、どのコースも北海道らしい自然を背景とした実践活動の紹介であった。

■2 日目

2 日目からのメインプログラムは、基調講演の北海道大学環境健康科学研究センター特別教授で名誉教授の岸玲子先生のお話が特に印象に残った。1996 年に初めて発表された『奪われし未来』（シーア・コルボーン）で指摘された環境化学物質による子どもの未来が奪われる健康影響の問題。さらには OECD の報告でも、日本の経済格差の拡大と貧困世帯の増加が指摘される社会環境要因による子どもの発達の問題。の 2 つの示唆は衝撃的であった。

このような大きな課題がある中でも、学校法人リズム学園の学園長で、全国初の公私連携型認定こども園「はやきた子ども園」園長の井内聖氏は、自分の園の子どもを育てるのはまちの中に子どもが育つ環境を作ることに他ならないと町と協働で自ら小学生の子どもたちと実践している「僕らの遊び場プロジェクト」活動の紹介を行い、まちづくりこそが子どもを健全に育てる基本であることを強調した。



①ポスター発表の様子



②こども環境活動賞受賞者によるスピーチ

神谷明宏 KAMIYA, Akihiro

聖徳大学児童学部児童学科 准教授
聖徳大学生涯学習研究所 研究員
こども環境学会 副会長



基調講演を受ける形で、安平町町長の瀧孝氏・下川町町長の谷一之氏・東川町町長の松岡市郎氏によるシンポジウムが行なわれた。各々の町で施行されている子ども環境への取り組みは地域の特色によって異なったものの、基本的なコンセプトとして以下の 3 点を共通点として挙げる事ができる。1 つ目は「幼児から学童までの幅広い子育て世代に選ばれるまちづくり」、2 つ目が「町民協働による持続可能なまちづくり」、3 つ目が北海道ならではの「自然環境を活用したまちづくり」ということである。最後の 3 点目は北海道特有の土地柄と言えるが、前者の 2 点は今後どの地域のまちづくりにおいても重点項目として注目すべき視点であろう。

■3 日目

3 日目は、A「自然と体験活動」B「困難をかかえるこどもと外遊び」C「共に遊び共に育つ」D「環境としての年齢」の 4 つの分科会が行なわれた。その中で私が特に強く興味を抱いたのが、B 分科会の 20 万人の難病を持つこどもが外遊びを奪われているという事実、ユニバーサルデザインはバリアフリーデザインとは価値が異なること。発達臨床の視点からは、その年齢でなければならぬ臨界期を見極めた体験の必要性がある事。療育の評価方法を考えるさまざまな領域の専門家の連携の必要性。そのためのデジタルとアナログの融合の重要性の 4 点についてであった。

例年の学会大会とは異なる大自然を背景とした数々の研究活動や事例発表は、こどもの成長発達にとって持続可能で安心安全なまちづくりとはどのようなものなのか、その原点を考える絶好の機会となった。

2016年12月～2017年3月までの研究・実践活動をご報告します。

12月

■ジュニア夢カレッジ2-プロから学ぶお仕事体験 **主催** 2016年12月11日

2回目となる「ジュニア夢カレッジ-プロから学ぶお仕事体験」を実施しました。この事業は、子どもと学生の2方向のキャリア教育を目的としたもので、学生39名と生涯学習研究所スタッフ及び地域サポーターとが連携しながら企画を進め実現したものです。この事業は本学の教員以外にも、新京成電鉄株式会社や伊勢丹松戸店、株式会社ディッツ等多くの企業にご協力頂きました。改めて感謝を申し上げます。

子どもたちがプロから学べる仕事は、全部で15種類あり、事前を選んでもらった仕事を1種類体験してもらいました。具体的な仕事は下記の通りです。学内9種類:「新聞記者」「パティシエ」「音楽療法士」「幼稚園教諭・保育士」「建築士」「心理カウンセラー」「管理栄養士」「看護師」「医者」、学外6種類:「グラフィックデザイナー」「鉄道職員」「エンジニア」「キャビンアテンダント」「弁護士」「百貨店の仕事」

参加した子ども達から「普段は入れない場所に入れてよかった」「想像していた何百倍も難しいお仕事だった」等の声が寄せられました。

■しろくま図工室 **協力** 2016年12月17日～18日

松戸市に長期滞在しているアーティスト、プリン・パニチュパン氏から、大成研究員のゼミの学生が「デザインシンキング」(スタンフォード大学のdスクールで行われている手法)のレクチャーを受け、子ども達のアイデアをとり入れ実施したオリジナルワークショップを企画・実施しました。

2月

■はじめよう！生涯学習—地域に眠った力を活かした「みさと雑学大学」から学ぶ、人と地域の活性化

主催 2017年2月25日

今回のテーマ別研究会では、水野守久氏(NPO法人みさと生涯学習ネットワーク 理事長)を講師としてお招きし、ご自身が設立から関わってこられた、市民主導の生涯学習「みさと雑学大学」の取組みについてご講演頂きました。その中で、地域に眠る達人の発掘や、活動を継続させるために必要な要素等、様々なお話を聴く事ができました。ご講演終了後、水野氏が長年実践してこられた手話落語を披露して下さいました。誰もが楽しめる落語は、まさに「いつでも、どこでも、誰でも 自由に学習機会を選択して学ぶことができる」という、生涯学習の理念に合致した素晴らしい内容でした。

3月

■全国学びとまちづくりフォーラム **協力** 2017年3月4日～5日

栃木県佐野市で行われた「全国学びとまちづくりフォーラム」の開催に協力しました。なお、このフォーラムは、初回から継続して協力をさせていただいております。今回のテーマは「学びを活かした地方創生」ということでした。分科会では西村研究員もコーディネーターをつとめさせていただきました。

■子育て・子育てバリアフリー教室 **主催** 2017年3月13日

この研究会は、子育て中の人や、ベビーカーのバスの乗降体験を通じて「子育てにやさしいまちづくり」について考えることを目的とし開催しました。

第1部は、グループワークが行い、「子育て中の親ならではの意見」「子育てを終えたシニアならではの意見」等、活発な意見交換がなされました。第2部では、ベビーカーを使ったバリア・バリアフリー参道の通行体験と、バスの乗降体験が行いました。参加者からは「日常では体験出来ない事が体験出来て楽しかった」「当事者が体験して声をあげることの大切さを、改めて感じた」等の声が寄せられました。

■ミニまつぶし **協力** 2017年3月25日～26日

埼玉県北葛飾郡松伏町で行われている「ミニまつぶし」に開催協力をしました。「ミニまつぶし」とは、子ども達が企画し、毎年実施している「子どもだけのまち」です。子どもだけのまちを疑似的に作り、社会の仕組みを学ぶことを目的としています。会場前には、開催時間前から多くの子ども達が列を作っていました。

■高齢社会支援を考える—最後まで地域で元気に暮らすために Part4 **主催** 2017年3月27日

第1部は、「地域福祉のプロ三木京子さんから聞く—松戸の高齢者支援の現状と課題」と題し、松戸市内の高齢者支援の現状について、ご自身に関わってきた高齢の方々との関わりを交えてお話し頂きました。

第2部では、「最後まで地域で生き生き暮らすために私たちができること」と題したワークショップを行いました。3つのグループにわかれ、参加者同士で意見交換を行った後、それぞれのグループ代表者が発表という形式をとりました。参加者からは、「松戸の高齢者への支援について、詳しく知る事が出来て良かった」「自分達ができる事について、改めて考えた」等の声が寄せられました。



編集後記

「研究成果の見える化」の一環として発行している「生涯学習研究所だより」も第4号の発行となりました。研究所の研究・実践活動を応援して下さっている全ての皆様に感謝を申し上げます。今号の柱は、当研究所が開設当初から重視してきた「参画教育」を受けた学生のその後としました。研究所開設から19年、社会の第一線で活躍する卒業生も増えています。今号の原稿はほとんど、そんな卒業生に執筆してもらいました。彼女たちと関わって感じる印象は、「ペイドワーク・アンペイドワーク問わず仕事を楽しんでいる」ということです。まさに「生涯学習的な生き方」を体現している卒業生達です。今後、彼女たちと現役学生の交流を通して、様々な化学反応をおこすような研究会の発足も検討しています。ご意見等ありましたら、お気軽にお知らせ下さい。今後とも聖徳大学生涯学習研究所を宜しく願います。(有川)